地域から学校へ

―「船津太刀踊り」の伝承母体の変化をめぐって ―

民俗班（徳島地域文化研究会）

髙橋　晋一*

要旨：近年，過疎・高齢化，少子化の進行により，地域の祭りや民俗芸能の伝承が困難になってきている。そうした中，地域の学校と連携して祭りや民俗芸能の伝承を進める「学校伝承」の取り組みが各地で広がりつつある。本稿では，海陽町船津に伝承されてきた「船津太刀踊り」を事例として，民俗芸能の学校伝承の形成と展開の過程を明らかにする。

キーワード：民俗芸能，伝承，地域，学校

1．はじめに

近年，過疎・高齢化，少子化の進行により，地域の祭りや民俗芸能の伝承が困難になってきている。そうした中，さまざまな形で伝承方法の模索が行われているが，地域の学校と連携して，児童や生徒が地域の民俗芸能を受け継ぐ「学校伝承」という方法が，とくに1990年代後半以降，全国で広く見られるようになってきた。2020年現在，徳島県内でも十数例の学校伝承の取り組みが見られる[1)]。そうした事例のひとつが，海陽町船津の「船津太刀（たち）踊り」である。船津は野根川の上流に位置し，南は高知県境に接する山村である。かつては林業や木炭生産を主産業としていたが，現在は衰退している。1995年には戸数24戸・人口49人であったが，2015年は９戸・17人と過疎化が進んでいる。

本稿では，海陽町船津の「船津太刀踊り」を事例として，当地において，どのような過程を経て民俗芸能の「学校伝承」という形が生まれ，展開していったかを明らかにする。

2．船津太刀踊りの由来

屋島の合戦に敗れた平家の武将・河内助右衛門は郎党数名を伴い当地に逃れきて，谷川沿いに僅かな平地を開き農地を作り，居所を定めた。その後長く船津の庄屋としてここに在住したが，源氏の追手をおそれ，開拓の暇をみて太刀を振り，一党の調練を怠らなかった。毎年盆の三日間は亡き主人通盛（平教盛の長子）をはじめ一族の法要を行い，その霊を弔った。この時，日頃の調練の成果を仏に手向け，霊を慰めたのが船津太刀踊りの由来といわれている[2)]。

太刀踊り（花取（はなとり）踊り）は高知県一円に広く伝承が見られ[3)]，同県を代表する民俗芸能である。源平の戦に起源を求める伝承も多いが，小唄を伴う念仏系の踊りが祖型と考えられ，高知県東部では盆踊りの一演目として踊られている。徳島県内で太刀踊り（花取踊り）が伝承されているのは，高知県境山間部の海陽町船津，那賀町木頭，三好市西祖谷山村に限られる[4)]。船津太刀踊りは，歌詞や踊りが同じ野根川筋の高知県安芸郡東洋町川口，真砂瀬（まなごせ）の太刀踊りと類似し，高知県側からの伝播が推察される[5)]。

＊　〒770-8502　徳島市南常三島町１－１　徳島大学大学院社会産業理工学研究部　takahashi.shinichi@tokushima-u.ac.jp
088-656-7126

3．芸態

踊り手は２人１組で，３，４組が一団となって踊る。そのほか，拍子木１人，語り手（歌い手）２，３人が加わる。昔は普段着で踊っていたが，現在は揃いの衣装（羽織・袴）にたすきを掛け，頭に鉢巻きを締め，手に刀を持って踊る。

踊り手は「切り」と「受け」に分かれ，１サイクルごとに役割が交代する。２人１組で，語り（歌）に合わせステップを踏み刀を振りながら踊るが，「エイ」のかけ声で「切り」が切り込む刀を，「受け」が背中越しに刀で受け止める。「受け」は「切り」と区別が付くよう，腰を低くして踊る。踊りながら，刀の柄を握る右手の拳を左手でたたき，シャンシャンという鍔（つば）の音を立てる。

「絵島えー」で始まる踊り歌の歌詞は昔から変わらない（紙幅の関係で歌詞は巻末CDに収録）。保存会を結成してから，前文と結びの歌を付け加えた。

4．地域での伝承

太刀踊りは，戦前は船津の文殊庵の境内で，毎年８月のお盆の晩に踊られていた。盆踊り（ヨイヤナ）の合間に太刀踊りを踊った。戦後，アメリカ進駐軍の警戒が厳しかった時期に一時休止したが，その後道具や衣装を新調し，1965年頃より再び盛んとなり，1971年には中・四国民俗芸能大会に県を代表して出演した[6)]。1984年２月，宍喰町無形民俗文化財に指定，2006年の町村合併により海陽町無形民俗文化財となった。

復活後は保存会を結成して伝承に当たっているが（**写真１**），近年は地域で定期的に踊る機会がなくなり，イベントや民俗芸能大会等，不定期に行われる公演への出演が中心となっている。町主催の芸能大会など，以前は１，２年に１回程度出演の機会があったが，ここ数年は演じられていない。地域に踊り手はいるが，過疎・高齢化が進み，次第に継承が困難な状況になってきている。

5．学校での伝承

1）杭瀬小学校での伝承

かつて，海陽町船津北路64に宍喰町立杭瀬小学校があり，山間部の船津・久尾地区の子どもたちが通っていた。徳岡寿一氏（海陽町宍喰浦出身）は大学を卒業して，1980年４月に同校に教諭として着任した。全校で何か取り組めることはないかという話が出たとき，船津に伝承されていた太刀踊りに注目し，全校児童（当時12，３人）で踊ることになった。教員は誰も踊りを知らないので，船津の人に学校に来てもらい指導を仰いだ。歌は生歌で船津の人が歌っていた。

写真１　船津文殊庵境内での太刀踊り（2004年）

太刀踊りは杭瀬小学校の運動会で披露した。服装は体操着に鉢巻き，太刀には竹の棒を使った。踊りの型は，地域で伝承されているものと基本は同じであった。その後，同校の児童数はさらに減少，1987年４月１日に休校（最終年度の児童数は７人）となり，同校での伝承は数年で途絶えた。

2）宍喰小学校での伝承

⑴太刀踊り導入の経緯

徳岡氏は1990年頃，宍喰小学校に異動になった。当時の音楽主任の教諭が，運動会の踊りとして何かないですかねと声がけをして（当時，運動会で低・中・高学年でそれぞれ踊りをしていた），その時，徳岡氏が，杭瀬小学校で太刀踊りをやっていたという話をしたことが，宍喰小学校で太刀踊りを始めるきっかけとなった。

徳岡氏が杭瀬小学校在職中に太刀踊りを教えた児童（河内一彦氏）が，その頃地元（宍喰）で高校生になっており，お願いをして河内氏が経験者として宍喰小学校児童の指導に当たるようになった。こうして，杭瀬小学校が休校となり途絶えていた子どもの太刀踊りが宍喰小学校で「復活」することになり，

写真 2　船津太刀踊り（宍喰小学校運動会，2019年 9 月14日）

写真 3　船津太刀踊り（第14回海陽町文化祭芸能大会（宍喰会場），2019年11月10日）

以後，現在まで続いている。

太刀踊りは，９月に行われる宍喰小学校の運動会で５・６年生が踊っていたが，児童数が減ってきたため，2010年頃から４・５・６年生の３学年で踊る形になった（**写真 2**）。児童数は年々減少しており，2019年は３学年合わせて40名であった。

踊りに使う太刀は長さ１メートル弱の木製で，柄をテープで巻き，太刀の柄をたたいて出す音を模すため，大きな鈴を付けている。最初の頃は，船津の人の生歌に合わせて踊っていたが，現在は民謡歌手（鎌田英一氏）に吹き込んでもらったレコードを流して踊っている。

⑵「選抜隊」の結成

2004年に総合的な学習の時間の第１回研究大会が宍喰小学校で開かれたとき，県下の教員にアトラクションとして披露するため，12人ほどで太刀踊りの選抜チームを作った。このとき大きな役割を果たしたのが，当時，総合的な学習の時間の教科主任であった三浦智佳子氏である。三浦氏は踊りを舞台映えのするような形に少しアレンジし，衣装や刀などの道具も揃えて披露した。その後も，三浦氏は同校の太刀踊りの指導に中心的に携わっている。

皆津隆一氏（船津出身で船津太刀踊り保存会員）は，2003 ～ 07年まで宍喰小学校の教頭を務め，同校における太刀踊りの指導にも関わってきた。イベントに出演する際は，ステージの広さの関係もあり全員が参加できないので，皆津氏が在職中に「選抜隊」を作り，宍喰町の商工産業祭や，海陽町文化祭芸能大会などのイベントに出演するようになった。選抜隊は一時休止していたが，2018年に久々に結成され，海陽町文化祭芸能大会（宍喰会場）に出演した（翌年も出演）（**写真 3**）。踊り手は２名１組となり，ステージ上で４，５組が向かい合って踊る。子どもの踊りは，足の踏み込み方など少し簡単にしている。

⑶現在の上演機会

現在，太刀踊りは，宍喰小学校の運動会（９月中旬），宍喰地区共楽運動会（10月初旬）で宍喰小学校の４・５・６年生が，また，海陽町文化祭芸能大会，海陽町文化祭芸能大会（宍喰会場），海陽町商工産業祭などのイベントで選抜隊が踊りを披露している。共楽運動会では，中学生（宍喰小学校の卒業生）も踊りの輪に加わる。

⑷踊りの指導・練習

太刀踊りは，基本的には５・６年生（後に４・５・６年生）の担任の中で，主任を中心に指導する形を取ってきた。夏休みの最終週に切り手・受け手の決定と，隊形のポジションの確認をし，９月に入ると運動会に向けた時間割に合わせて練習する。昼休みには体育館で希望者が自主練習をするが，上の学年の児童たちが４年生に自主的に教える姿も見られる。ここ数年は，まず学校の方で指導して，最後に仕上げを船津出身の河内一彦氏（前出）に見てもらう形にしている。学校もスケジュールが忙しく，運動会が終わると全体練習はしていない。

選抜隊の踊りは，主に皆津氏が指導している。イベント前に，昼休みを利用して数回練習する。

６．おわりに

以上，海陽町船津に伝承されてきた「船津太刀踊

り」が，どのような過程を経て学校という新たな伝承母体において伝承されるようになったのか，また現在，どのような形で伝承されているかを明らかにしてきた。

船津太刀踊りの学校伝承は，地元・船津の杭瀬小学校で，地域住民から指導を受ける形で始められた。同校の休校（1987年）により学校伝承は途絶えたかに見えたが，同校で太刀踊りに携わった教員（徳岡教諭）の宍喰小学校への着任により，再び伝承の火が灯された。熱心な指導者（三浦教諭，皆津教頭）に恵まれ，また，杭瀬小学校での踊り経験者（河内氏）や保存会員のサポートも受け，運動会での集団演技と，少人数でステージで演じる「選抜隊」という二本立てで学校伝承が展開してきた。

民俗芸能を受け継ぐのは「人」である。船津太刀踊りの事例では，教員と地域（船津）住民の連携により地域から学校へとうまく伝承のバトンが渡され，さらに学校において，教員・児童・保護者等の理解・協力のもと，船津の住民や出身者も関わりながら，学校伝承が継続している。教員や保護者の中には，小学校時代に太刀踊りを経験した人もおり，太刀踊りを身近な文化に感じている。また，指導の中で，教員は児童に「地域の人から受け継いできた踊り」であることを常に説明しており，児童も「伝承者」としての意識を持つようになっている。関係者の間で，「学校で地域（宍喰）の伝統文化を学び，受け継ぐ」ことの意義についての共通理解が醸成されているのである。

なお，太刀踊りの基本的な型は，学校においても変わりなく継承されているが，足のステップなど一部簡略化されている部分もある。また，運動会での集団演技では，空間を広く使うフォーメーションに変わっている。道具や服装も，運動会では体操服に鉢巻き，太刀は手作りの木刀を使っている。一方，「選抜隊」では本格的な道具（金属製の刀）・衣装を揃え，従来の地域での伝承に近い芸態を伝えつつ，踊りを一部見栄えのよい形にアレンジしている。民俗芸能の伝承の場が「地域」から「学校」に移行する際，新しい文脈に合わせて芸能の形が一部改変されていることがわかるが，こうした点も民俗芸能の学校伝承のひとつの特徴と言えよう。

謝辞

調査に当たっては，田中邦男氏，佐野誠二氏，皆津隆一氏，徳岡寿一氏，三浦智佳子氏，河内一彦氏にたいへんお世話になりました。ここに記して謝意を表します。

注

1）船津太刀踊りのほか，足代の獅子舞（東みよし町），一宇の雨乞い踊り（つるぎ町貞光），坂下獅子舞（つるぎ町半田），じょうれい踊り（阿波市市場町），案内神社の獅子舞（阿波市吉野町），高川原の獅子舞（石井町），高原の獅子舞（名西郡石井町），入田の獅子舞（徳島市入田町），立江祇園囃子（小松島市），木頭の太刀踊り（那賀町木頭）などがある（筆者調査による）。

2）宍喰町教育委員会（1986），1836－1837頁。川口や真砂瀬など，近隣の太刀踊りにも平家の落人伝承は聞かれる。平家の落人が逃げ込んできたときに，着けていた太刀・鎧が川を逆さまに流れた。野根川の川原に流れ着いたところ，落人が各土地で神社（河内神社）を建てて祀ったが，その神社のあるところに太刀踊りがあるという伝承も聞かれる（檜（2004），759頁）。

3）高知県（1978），468頁。

4）檜（2004），757－764頁。

5）松岡（2001），６－７頁，15頁。

6）宍喰町教育委員会（1986），1838頁。

文献

高知県編（1978）『高知県史　民俗編』高知県

宍喰町教育委員会編（1986）『宍喰町誌　下巻』宍喰町教育委員会

徳島県教育委員会編（1989）『徳島県の民俗芸能』徳島県教育委員会

檜瑛司（2004）『徳島県民俗芸能誌』錦正社

松岡智春（2001）「東洋町川口地区の太刀踊り」『土佐民俗』76号，１－16頁

From Community to School: the Change of the Way of Succession of Folk Performance in the Case of Funatsu Tachi-odori in Kaiyo Town, Tokushima

TAKAHASHI Shin-ichi＊

＊ 1-1 Minamijosanjima-cho, Tokushima 770-8502, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.63（2021），pp.37－40.